

はじめに

——近代中国研究班所蔵「荒木貞夫の口述記録」について——

瀧下 彩子

本書が紹介する荒木貞夫の口述記録は、近代中国研究班（2002年以前は近代中国研究委員会）が保管する文字資料および音声記録である。2007年、公益財団法人東洋文庫の建て替えに際し、班の保存資料を整理していた本庄比佐子研究員（当時）が発見した。文字資料は、荒木貞夫とインタビュアーの「シベリア出兵」に関する対談を書き起こしたものであり、荒木本人による朱筆が加えられている。音声記録は、4本のオープンリールテープに、「満洲事変」に関する対談の生音声録音されたもので、合計133分におよぶ（<https://toyobunko.repo.nii.ac.jp/records/2000329> [2024年3月現在] にて公開）。

インタビュアーは、当時、東洋文庫近代中国研究委員会の研究員であった故衛藤藩吉（1923-2007）氏であり、1957年に当時東京都狛江市にあった荒木貞夫の自宅で聞き取り調査を行った際の記録と推定される。これらの記録には、調査の概要等を記した資料が付随しないため、その目的や経緯について知ることは、現在では困難である。しかし、本庄比佐子、久保亨ら近代中国研究班のメンバー、ならびに平野健一郎をはじめとする現代中国研究班のメンバーで話し合いを重ねた結果、戦後の1957年当時における荒木貞夫の認識や思想、社会への向き合い方を示す一次史料としての価値はあると判断し、『近代中国研究彙報』第42-44号（2020-2022）に内容を公開した。本書では、そのテキストを更に推敲し、修正を加えて再録している。また、音声記録については、文字起こしを矢野真太郎が担当し、その確認と校正を、相原佳之、久保亨、関智英、瀧下彩子、松重充浩が5年間に18回（前後の打合せを含む）の研究会を開催して行った。満洲事変に関する口述記録については、関智英、矢野真太郎の論稿

を新たに収載している。

荒木貞夫（1877-1966）は、陸軍士官学校を卒業後、ロシア関係の軍務に従事し、陸軍大学校在学中には日露戦争に従軍した。主として参謀本部に勤務し、シベリア出兵では浦塩派遣軍参謀を務める。1928年に陸軍大学校校長となり、1931年に犬養毅内閣の陸軍大臣に就任、1933年に陸軍大将となった。シベリア出兵の経験から反共産主義的立場をとり、さかんに日本精神を鼓吹した皇道派の中心人物として知られる。しかし、1936年に二・二六事件が起きると、荒木の言動が青年将校の過激主義を誘発させたと言われ、予備役に編入、陸軍への影響力を失った。1938年に陸軍統制派への抑止要素を期待され、第一次近衛内閣・平沼内閣で文部大臣に就任する。戦後の極東軍事裁判では、日本の軍国主義化を進め侵略思想を煽ったとしてA級戦犯となり、終身刑の判決を受けるが、1954年に体調不良を理由に仮釈放が認められ、翌年、釈放された¹⁾。

巣鴨拘置所を出所した荒木は、半藤一利の取材による「スガモ断腸の記——獄舎を出でて感あり」などを皮切りに、しばしばマスコミにとりあげられるようになり²⁾、ラジオで荒木の肉声が放送されると、ジャーナリストや研究者が直接荒木に面談する機会も増えた³⁾。本書で紹介する衛藤氏の1957年のインタビューは、こうした荒木をめぐる動向を背景に行われたものと考えられる。当時、すでに戦後十年が経過し、高度経済成長期を迎えた日本は、ラジオや映画といった娯楽を国民が享受し、新たなスターの存在が不可欠な時代であった。国民一般の心理において、戦前の軍国主義や戦犯という存在への抵抗感はずでに薄れ、一種の荒木ブームが起きていた様子が見え、そのあまりにも屈託の無い言動は、識者の諦観と苦笑を誘っているようにも見受けられる。荒木は、その晩年まで全国に講演に出かけ、1966年、九十歳の時に奈良県十津川村に招かれた際に心臓発作によりこの世を去った。

前述のように、本資料について現在では、インタビューの目的や実施にあたっての認識、荒木の発言に対する判断などについて、明らかにすることはできない。インタビュートーンとしても、深く切り込む質問はなされておらず、荒木は「話したいこと」を語るに終始している。何を話し、何を話していないの

か、事実の何を変更したのか、を知るすべはなく、このような点において、記録を發表する作法としては問題をはらんでいる。しかし、1958年当時の荒木なりの主張・反省・陶醉といった生々しい本音を、本人の肉声によって聞くことができるという点では、やはり貴重な資料であり、ここから、荒木貞夫の人間像を結ぶことも可能であろう。

荒木という人物については、戦前から戦後にかけて、本人による講演記録や著作などの一次史料が非常に豊富に存在する。しかし、荒木貞夫を研究の対象とした専著は見られない。それは、日本近代史、とりわけ陸軍をアツかった研究において、日本をアジア太平洋戦争へと赴かせた理論や思想といった点から、特に見るべきものが荒木には欠けているからかもしれない。皇道派の首魁、生き残ったA級戦犯といったイメージだけが漂い、歴史的存在としての意味が茫洋としているのである。荒木と同時代に、陸軍省に勤務した関係者にあっても、その人柄に私淑する一方で、極端な派閥人事や内閣との妥協といった、日頃の荒木が主張する精神論とは辻褃のあわない姿勢に失望し、結局この人は「神輿に乗っている」だけだとの印象を持ったと述べる⁴⁾。しかし、そのような荒木の言葉が戦前の日本社会に極めて大きな影響力を持ったこと、戦後にあっても様々な関心をもって迎えられ、歓迎さえされたことは確かである。それは、日本の近現代史を考える上で、どのような意味を持つだろうか。

高等学校において新科目「歴史総合」が採用されて一年あまりがすぎ、歴史教育の現場では様々な試みがなされている。この科目では、これまでの「日本史」「世界史」が、大学受験対策に時間を割くあまり、おろそかにされがちだった近現代史を必修とし、世界史における日本の動向を学習することに重点が置かれている。さらに、その方法として、史資料を用いた対話をくりかえし行い、思考の精練を重ねることによって、学習者自身が問題を設定し、それに応答しうる思考力や表現力を身につけることをめざしている。これは、従来は大学において研究者が行ってきた歴史学の方法であった。それを大学の内にとどめず、国民共有の思考の方法とし、自国の歴史——とりわけ、日本を「戦争」という重い事象と切り離すことのできない近代史——への認識を深め、またこ

の時代に対する自身の考えを持つことは、今後の現代世界に日本人として向き合うために、あまりにも重要な作業である⁵⁾。

ある時代における世界全体の動向を理解し、その中にアジアや日本の動きを位置付け、見極めることは、考察の基礎作業とも言える。そこから日本国内の公論や国民心理をかえりみたま時、荒木貞夫の言葉、アジェーションが同時代の日本人の心にどのような影響をおよぼしたか、それは、アジア太平洋戦争を跨ぐ日本人の心性のあり方を考える際に、重要な資料となるかもしれない。本書がそのような役割を担うことができたならば、著者一同の本懐である。

なお、衛藤藩吉氏の研究とオーラルヒストリーに対する向き合い方については、衛藤氏に師事された平野健一郎氏から貴重なご寄稿をいただいた。ここに謝意を表したい。

注

- 1) 『近代日中関係史人名辞典』(東京堂出版, 2010年), 半藤一利・横山恵一・秦郁彦・原剛, 『歴代陸軍大将全覧』(中央公論新社, 2010年)。
- 2) 「スガモ断腸の記——獄舎を出でて感あり」(『文藝春秋』33(21), 1955年11月) 202-205頁。その他, 「マイクの広場 A級戦犯」(文化放送, 1956年4月14日), 「多数決はヘンだ——何よりも五箇条の御誓文」(『朝日新聞』1956年6月28日) 11面, 「わが家のリクエスト(老人の日に孫と登場し「筑前ピワ」をリクエスト)」(文化放送, 1960年9月15日) など。
- 3) 半藤一利, 秦郁彦, 原剛らが荒木との面談について述べている。前掲『歴代陸軍大将全覧』(148-159頁), 「昭和の陸軍——日本型組織の失敗」(『文藝春秋』85(8), 2007年6月)。
- 4) 西浦進は下の者にぞんざいな態度をとる宇垣一成と荒木を比較し, 達筆な墨書の手紙で将来の心がけなどを諭す荒木の人柄を讃える一方, 陸軍大臣就任後の荒木に失望したと述べる(『昭和陸軍秘録』, 日本経済新聞出版社, 2014年, 85-112, 176頁)。
- 5) 歴史学研究会編, 『「歴史総合」をつむぐ——新しい歴史実践へのいざない』(東京大学出版会, 2022年), 久保亨, 『戦争と社会主義を考える——世界大戦の世紀が残したもの』(講座:わたしたちの歴史総合5, かもがわ出版, 2023年)。